

巻 頭 言

地域学部長 永山正男

この『地域学論集』を鳥取大学地域学部の研究紀要として上梓する。

地域学部はこれまで改組・改革を重ねてきたが、その経緯とともに研究紀要も名称を変えてきた。1959年12月には鳥取大学の開学10周年を記念して『鳥取大学学芸学部研究報告』の創刊号が刊行されている。この学芸学部研究報告は24巻まで続き、1974年の25巻からは『鳥取大学教育学部研究報告』となっている。この教育学部研究報告は、教育科学、人文・社会科学および自然科学の三分冊で1998年の第47巻第2号まで継続した。教育地域科学部への改組に伴い、1999年からは『鳥取大学教育地域科学部紀要』となった。巻号も第1巻第1号と新しい出発を示す意気込みがうかがえる。この教育地域科学部紀要も2004年の第5巻第2号でその使命を終えることとなった。2004年4月1日に地域学部が成立したからである。

研究紀要をめぐるこれらの経緯は、わが国の教員養成系学部が大きな制度改革を何度も経験せざるを得なかったことを、一例として示している。同時にそうした激動の中でも多くの教員は着実に研鑽を積み、研究論文を執筆してきたことをも示しているだろう。しかし、地域学部と『地域学論集』はこれらの単純な延長線上にあるのではない。地域学部は小学校教員をも含む教員養成機能を持つ特別な学部であるが、既に教員養成系学部ではなく、地域学の専門学部となったからである。

今日、地域学を構築することが如何に焦眉の課題であり、また基本的な課題であるかは、この学部改組を行うことによって我々が実感したところである。それは、地域で様々な活動を行っている人々や自治体関係者などの実際的要望でもあり、地域学の視点からの知の再編成を目指す学問的課題でもあった。また、本年7月には韓国から3大学、中国から3大学1国家機関、日本から3大学を招き北東アジア地域学国際会議を行ったが、この会議は成功し、来年以降も定例化することとなった。地域学は国境を越えて求められているのである。

「地域学部では地域という概念を人々が生活している空間の広がり・そこ

における社会関係を示すものとしてとらえている。したがって、内容も規模も様々な地域が存在し、その全体が世界を形成していると考えている。今日人々が生きていくうえで解決を迫られている多くの問題は、この地域をベースとして考えられるべきである。」

「地域学部は地域の公共課題を環境，文化，教育および政策の四つの視点から教育・研究する学部である。・・・その際，人々の生活のあり方は，自助・協同・市場および公共という四つの領域からなっている。本学部は，このうち地域の公共性を教育・研究の対象としている。」

この地域学部の提起は幸いにも多くの方々の共感を呼ぶことになった。また，大学を目指す受験生にも訴える力があり，本年の受験倍率は記録的なものとなった。しかし，地域学の構築はまだ緒に就いたばかりである。地域学部の全教員は地域学の体系化と地域学の個別分野の深化，地域学の教育体系化という使命を背負っているといえる。『地域学論集』が，この意義深い課題を果たす上で大きな役割を果たすであろうことを宣言したい。

本誌の性格については一言付け加えておく必要がある。地域学部は地域学の専門学部であるが，それを構成する教員は，大幅な新規採用を行ったとはいえ，教育学部・教育地域科学部からの教員が大多数である。このスタッフで地域学の構築を目指すのであるが，個々の教員はそれぞれ元来の個別専門性を有している。その研究は，今後も続けられなければならない。したがって，本『地域学論集』が地域学部の研究紀要であるということは，そうした研究の成果も同時に掲載しているということの意味する。

『地域学論集』を創刊した我々は地域学の揺籃期を担うものである。学部も本誌も過渡的性格を免れ得ないが，地域学のために高い志を持って臨みたいと思う。